

平成 31 年度

小 論 文

10 : 00 ~ 11 : 30

国 文 学 科
(推 薦)

注 意 事 項

1. 開始の合図があるまでこの冊子を開いてはいけません。
2. 合図があってから受験番号を小論文解答用紙の指定の欄に記入
しなさい。
3. この冊子は4ページあります。
4. 印刷の不鮮明な箇所や、汚れの箇所があった場合は、すみやかに申し出なさい。
5. 小論文解答用紙は2枚入っていますが、提出するのは1枚だけです。残りの1枚は下書き用です。
6. 小論文は縦書きで書きなさい。
7. 冊子と下書きに用いた解答用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

仏教文学の領域では譬喩譚が^(注)多く用いられてきた。これは難解な仏教の教義を平易に説くための方便である。たとえ話の後はしばしば読み取るべき教えが評語として付いている。たとえば日本でも広く読まれた仏典『百喻経』には次のような話が載る。

譬へば蛇有るが如し。尾、頭に語りて言はく、「我、応に前に在るべし」と。頭、尾に語りて言はく、「我、恒に前に在り。何を以て卒かに爾^{には}る」と。頭、果に前に在り。其の尾、樹に纏^{まと}ひて去ることを得る能はず。尾、放ちて前に在り。即ち火坑に墮ち、焼爛^{せうらん}して死す。

師と徒弟も亦復是くの如し。言はく、「師、耆老にして每恒に前に在り、我等諸年少応に導首と為るべし」と。是くの如きの年少、戒律を閑^{まも}らず多くの犯す所有り。因つて即ち相牽^{あひひき}ひて地獄に入るなり(第五四話)。

前半では一匹の蛇の頭と尾とが擬人化して会話をする。尾は自分が前を行くと言いだす。頭が断ると、尾は木に絡まって進ませない。それで尾を先に行かせることにする。すると火の燃え盛る穴に落ちて共に死んでしまった。後半はこの話の教訓を説く。師弟関係も同じことだ。師は年長として年少の弟子を導くものである。弟子は戒律を守らず多くの罪を犯し、師も道連れに地獄に落としてしまうと説く。この話も後半を取り除くと、擬人化した蛇の頭尾二人の言動を語った動物寓話となる。

これらの話の主眼は動物の言動の面白さを語ったのではなく、何らかの教えを説くことにある。そのために動物の話をとえとして利用しているに過ぎない。

「トビウオのように速く泳ぐ人」という時、トビウオは単に泳ぎの速い人に対するたとえとして用いられているに過ぎない。トビウオは泳ぐのが早いというゾクセイ^{ゾクセイ}を持っているという認識が前提にあるのだ。ところが動物寓話においては、へたとえとなるものが実体化する。すなわちトビウオは擬人化して、速い人そのものとして登場するわけだ。つまり現実にはたとえとして言葉で示されるに過ぎない動物が、物語の中の世界ではキャラクターとして実体化しているのである。

譬諭譚にはもちろん人間中心の物語世界もあるが、他方で、このように動物たち、さらには草木・器物、あるいは抽象的な記号や観念が人間のように活動する世界が描かれているのだ。動物の擬人化の歴史を考える時、擬人化された異類をキャラクターとして人間や神仏、妖怪と明確に区別する物語の設定(世界観)を備える譬諭譚は中核となるものだろう。こうした物語が日本においては主に仏教説話集の中で展開していくことになる。

平安時代後期の『今昔物語集』や鎌倉時代の『沙石集』が譬諭譚を多く収録する代表的な説話集である。『沙石集』巻五には奈良に住む蟻と蟪だとがそれぞれの名前の由来を問答する話が載っている。また仏教の経論の中に「畜類ノ問答多ク見エタリ」として、蛇・亀・蛙の話、虬きゅう(海に棲む蛇のような生き物)と猿の話、烏・鳩・蛇・鹿の話、百足・山精・蛇の話が挙げられる。蛇・亀・蛙の話のみてみよう。

或る池の中に蛇と亀と蛙かはづと知音にて栖みけり。天下ひざり早して池の水も失せ、食物も無うして、飢ゑて徒然なりける時、蛇、亀をもて使者として蛙の許へ、「一時の程おはしませ。見参せん」と云ふに、蛙、返事に偈げを説いて「飢渴けかつせめられぬれば、仁義を忘れて食じきのみ思ふ。情なほも好よしもよのつねの時こそあれ、かかる時なれば、え参らじ」とぞ返事しける。

げにもあぶなき見参なり。ぐつとのまねなば、かばかりの事と思ふとも、よみがへるみちもあらじ。

蛇と亀と蛙は親しい友人同士であったが、早魃いで池の水も干上がり食べ物がなくなった。そこで蛇は亀を使者として蛙を家に招待した。しかし、飢渴した蛇が自分を食べようと企んでいると思つた蛙はそれを断つたのだつた。この説話にはほとんど教訓がない。「げにもあぶなき見参なり。ぐつとのまねなば、かばかりの事と思ふとも、よみがへるみちもあらじ」と、軽率に近づくとこの危うさを寸評しているくらいである。烏・鳩・蛇・鹿の話や百足・山精・蛇の話に至っては、寸評さえもせず、単に寓話を挙げるだけである。とはいえ、文脈的に、ただ動物の話を娯楽的に読み流すのではなく、これらもまた何らかの教訓を読み取るべきものであることは確かだろう。

つまり譬喩譚とは、話末に評語があるにしろ、ないにしろ、読み手・聴き手を教え導くためのものと考えられてきたのだ。右の話では、蛇は貧者の象徴として描かれている。食がある時は人道に悖ることをしないが、飢え苦しむ時はいかなる罪を犯しても食を得ようとする。そうした貧者が蛇としてキャラクター化されているのである。たとえ話の世界であるから、いかなる動物であっても、あるいはムキ物^ウであっても、人間のように行動することに違和感を覚えない。我々読者もまたそれを当然と受け止める。

本来、こうした動物寓話は、教訓の部分を伴い、また伴わずとも教訓を読み取るように受容されてきた。中世から近世、さらに近代、現代に至ってもそうした譬喩譚の流れは続いている。昔話や童話から教訓を読み取ることは自然に行われることだろう。教訓の読み取り方は様々であり、時として強引な読解も見られる。「桃太郎」の鬼退治を愛国教育に利用したのはその典型であり、また「猿蟹合戦」を親孝行な子蟹の仇討と賞賛することもできる。今日においてはそうした押しつけがましい教訓ははやらないが、子どもを対象とした交通安全ルールや社会マナーの向上、ゴミの分別など地域生活の改善のPRなどに受け継がれている。

また形式的には何らかの教訓を伴うものであっても、取って付けたようなかたちだけの教訓が目立ってくる。それがケン^エチヨに現れるのは中世後期の物語草子群、すなわちお伽草子という物語文学である。

『雀の発心』はその名の通り雀が発心修業して往生の素懐を遂げる物語絵巻である。話末に次のような評語がある。

かやうに鳥類までも憂き世を厭ひ、浄土を願ふ心あり。いはんや人間においてをや。返す返すも恥ぢ入りたる事どもなり。いかにもして仏法に近づき菩提の縁を求むべきなり。

子どもを蛇に食べられた雀の夫婦の人生を描いた物語で、中には雀や蛇が詠んだ歌も豊富に記されている。絵巻物であるから、それを絵と共に楽しむのである。絵物語としては、それだけで十分楽しめるだろう。だから右に挙げた話末評語はいかにも取って付けた印象が拭^オえない。ただこうした評語を付けることは、物語の伝統として受け継がれてきたものであり、物語との繋

がりの強弱はあれ、形式的には付けるのが一般的であった。さらに読み取るべきメッセージを伴わない物語、つまり娯楽を目的としたものも次第に増えていく。

(伊藤慎吾編『妖怪・憑依・擬人化の文化史』による)

(注) 譬喩譚……比喩譚に同じ。

問一 傍線部ア、オの片仮名を漢字になおし、漢字は読みがなを解答欄に書きなさい。

問二 傍線部「くつ」とのまれなば、かばかりの事と思ふとも、よみがへるみちもあらし」とあるが、ここから助動詞をすべて抜き出し、(1)終止形(2)活用形(3)意味を書きなさい。なお、意味は後の語群から選ぶこと。

〔語群〕 過去 完了 可能 打消推量 使役 自発 打消意志 断定 受身

問三 傍線部「現実にはたとえとして言葉で示されるに過ぎない動物が、物語の中の世界ではキャラクターとして実体化している」とあるが、『百喩経』の話では、何がキャラクターとして実体化して何のたとえとなっているのか、四〇字前後で説明しなさい。

問四 傍線部「教訓の部分に伴い、また伴わずとも教訓を読み取るように受容されてきた」とあるが、そのように受容されてきたのはなぜか。その理由を四〇字以内で説明しなさい。

問五 本文の内容をふまえて、物語の教訓性と娯楽性についてあなたの考えるところを具体的な例を挙げながら述べなさい。
(六〇〇字以内)